

白居易の詩作に見られる王維の影響に関する一事例

丹羽博之

要旨

詩仏と称された王維の「秋夜独坐」の詩には、白居易の「廬山草堂、夜雨独宿、寄牛二・李七・庾三十二員外」詩と多くの点で類似している。以下にその例を挙げる。

王維の詩の創作年は不明だが「白髮」「老病」の語から判断するに、四十歳以降の作であろう。

白居易の「廬山草堂、夜雨独宿、寄牛二・李七・庾三十二員外」の詩は、彼が江州に司馬として、左遷されていた元和十三（八一八）年の秋の作と考えられる。時に白樂天四十七歳。

両詩は共に白髮の翁であり、詩句の類似を示すと以下のようなになる。

王維詩「独坐」↓白居易詩「独宿」

「悲双鬢」↓「白髮」

「雨中」↓「夜雨」

「老病」↓「一病翁」

「惟有学無生」↓「唯有無生三昧觀」

これらの詩句の類似から、白居易が王維を意識して創作したことは明らかであろう。その王維の詩に更に一ひねりして白詩は詠まれたと考えられる。王維・白居易は共に、高級官僚の地位にあったが、半官半隱の生活を送ったこと。この他、王維の「送元二使送安西」の詩も白詩はしばしば利用して詠んでいる。この両詩を通して二人の共通の生き方、特に白は王の生き方に倣ったことを指摘した。

キーワード…王維 白居易 秋夜独座 廬山草堂

一、王維「秋夜独坐」詩と白居易「廬山草堂、夜雨独宿、寄牛二・李七・庾三十二員外」詩

王維「秋夜独坐」詩と白居易「廬山草堂、夜雨独宿、寄牛二・李七・庾三十二員外」詩は種々の点で類似する。以下にそのことを検討する。

秋夜独坐 王維

独坐悲双鬓 独坐 双鬓を悲しみ

空堂欲二更 空堂 二更ならんと欲す

雨中山果落 雨中 山果落ち

灯火草虫鳴 灯火 草虫鳴く

白髮終難変 白髮 終に變じ難く

黄金不可成 黄金 成すべからず

欲知除老病 老病を除くを知らんと欲せば
惟有学無生 惟だ無生を学ぶ有るのみ

（王維の詩は『王維詩索引』『京都大学中国語学中国文学研究室編 采華書林 一九七七年』の箋註王右丞本・趙松谷本による。）

白居易の作は

廬山草堂、夜雨独宿、寄牛二・李七・庾三十二員外（廬山草堂、夜雨独宿す、牛二・李七・庾員外に寄す）「一〇七九 元和
十三（八一八）年 秋・四十七歳」

丹霄携手三君子 丹霄手を携ふ 三君子

白髮垂頭一病翁 白髮頭に垂る 一病翁

蘭省花時錦帳下 蘭省の花時 錦帳の下

廬山夜雨草庵中 廬山の夜雨 草庵の中

終身膠漆心応在 終身膠漆 心応に在るべし

半路雲泥跡不同 半路雲泥 跡同じからず

唯有無生三昧観 唯だ無生三昧の観有り

栄枯一照両成空 栄枯一照にして 両つながら空と成る

（白氏文集は那波本を底本とした新釈漢文大系『白氏文集』（明治書院）による。詩番号も同じ。旧字は新字に改めた。）

というもの。

王維の詩の創作年は不明だが「白髮」「老病」の語から判断するに、四十歳以降の作であろう。白詩は「三君子」「一病翁」「三昧観」

白居易の詩作に見られる王維の影響に関する一事例

「一照」「両成空」と数字を巧みに詠み込んでいる。後述するが、「蘭省花時錦帳下 廬山夜雨草庵中」の対は、名句として日本でも、『和漢朗詠集』『枕草子』『千載和歌集』『新古今和歌集』にも利用されている。

王維詩と白詩の類似を示せば、次の通り。

王維「独坐」↓白居易「独宿」

「悲双鬓」↓「白髮」

「雨中」↓「夜雨」

「老病」↓「一病翁」

「惟有学無生」↓「唯有無生三昧觀」

これらの詩句の類似から、白が王維の詩を意識して創作したことは明らかであろう。

なお、王維の「秋夜独坐」詩は、『文選』（卷二十三）の阮籍「詠懷詩（独坐空堂上篇）」の詩の

独坐空堂上 独り坐す 空堂の上

誰可与飲者 誰か与に^{とも}歛しむ可き者ぞ

を踏まえている。阮籍「詠懷詩」↓王維詩↓白詩という系譜になる。

二、白居易の王維詩利用

次に白詩における王維詩の利用の他の例を挙げる。この王維の詩は送別詩の傑作で後世にも多くの影響を与えた詩である。

送元二使安西 元二の安西に使いを送る

渭城朝雨裊輕塵 渭城の朝雨 輕塵を裊し

客舍青青柳色新 客舍青青 柳色新たなり

勸君更盡一杯酒 君に勸む更に尽せ 一杯の酒

西出陽關無故人 西のかた陽關を出でなば 故人無からん

この王維の名作は、「渭城曲」「陽關曲」とも呼ばれ世上に流布していた。王維のこの名作を白居易は何度も利用している。以下にその代表的な例を挙げる。

対酒五首（其四）二六七九

百歲無多時壯健 百歲も多時 壯健なる無し

一春能幾日晴明 一春も能く幾日か 晴明なる

相逢且莫推辭醉 相逢ふとき且く 推して酔ふを辭するなかれ

聞唱陽關第四聲 唱ふを聴け 陽關の第四聲

結句には「第四声、勸君更尽一杯酒、西出陽關無故人」の自注があり、白居易は前掲王維の詩を意識して「陽關第四声」と表現している。白居易の王維詩への傾倒ぶりが読みとれよう。

次に「南園試小楽（南園にて小楽を試む）」（二六五〇）を挙げる。

（前半四句略）

高調管色吹銀字、高く管色調べて 銀字を吹く

漫曳歌詞唱渭城 漫く歌詞を曳きて 渭城を唱ふ

不飲一盃聽一曲 一盃を飲み一曲を聴かずんば

將何安慰老心情 何を將つてか 老心情を安慰せん

新釈漢文大系『白氏文集』の解題に「自宅（南園）で音楽の宴を催した折りの作。大和三年（八二九）、五十八歳、長安、刑部侍郎。」とある。自宅で音楽の宴を催した際にも、白居易は、王維の渭水の曲（「送元二使安西」）を演奏させており、彼の好みの詩であったことを示している。

次に「晩春、欲携酒尋沈四著作、先以六韻寄之（晩春、酒を携へ沈四著作を尋ねんと欲し、先づ六韻を以て之に寄す。）」（三三二一）を挙げる。

病容衰慘憺 病容 衰へて慘憺たり

芳景晚蹉跎 芳景 晩れて蹉跎たり

無計留春得 春を留め得るに計無く

争能奈老何 争でか能く 老を奈何せん

篇章備報答 篇章 報答に備く

杯讌喜経過 杯讌 経過を喜ぶ

顧我酒狂久 我を顧みれば 酒狂久しく

負君詩債多 君に負ふ 詩債の多きを

敢辞携緑蟻 敢へて辞す 緑蟻を携ふるは

只願見青蛾 只だ願ふ 青蛾を見んとすればなり

最憶陽関唱 最も憶ふ 陽関の唱

真珠一串歌 真珠 一串の歌

とあるが、最後の方の「最憶陽関唱」の句には、以下の白居易の自注がある。

「沈有謳者。善唱西出陽関無故人詞（沈に謳者有り。善く西のかた陽関を出でなば故人無からんの詞を唱ふ）」

とあり、沈家には、王維の「陽関」の詞を善く歌う者がいて白居易のお気に入りの歌い手で、白居易は王維の詩にも関心を持っていたことを示している。

以上見てきたように、白居易は繰り返し王維の名作を意識して詩を創作している。この他、王維詩の結句を利用した例もある。その例を挙げる。

短歌行 ○五七八

勸君且強笑一面 君に勧む 且く強ひて笑ふこと一面

白居易の詩作に見られる王維の影響に関する一事例

勸君復強飲一盃 君に勸む 復た強ひて飲むこと一盃

とあるが、王維の「勸君更尽一杯酒」を利用していると言えよう。このように白居易は王維の「送元二使安西」詩を何度も自作に詠み込んでおり、白居易の王維への傾倒ぶりを示している。

以上の例から白居易は王維の陽関の漢詩を何度も利用して詩を創作しており、白居易が王維詩を種々に自作に取り入れている一例と言える。この他、王維の「黄雀癡 雜言走筆」詩を利用して、白居易は「燕詩示劉叟」詩を創作したことは別稿で取り上げた（拙稿「日本と中国の梁燕」（大手前大学論集 第20号 二〇二二年三月）。両詩には「啁啾」「一一」「空巢」「東西南北飛」「隋風四散飛」等の語が共通し、白詩は王維詩を意識して創作したことは明らかである。なお、この白詩は『孔子家語』（顔回篇）『芸文類聚』（卷九十二・鳥部下・燕）の表現も利用している。

三、先行研究紹介

以下に王維と白居易の関係を述べた研究を挙げる。

①王維「游悟真寺」（卷十二）の釈清潭『淵明・王維全詩集』（復刻愛蔵版 日本図書 一九七八年）の余論には、

【余論】この篇は、十二韻を以て成る、右丞としては長律の方に属す、楽天のこの題の詩に、欲_レ雨生_二白煙_一、舌根如_二紅蓮_一、無益同_二素餐_一、以_レ此自慙傷、從_レ此終身間等の句あり、右丞が此の詩を粉本として成ること、何人も疑ふ所無し、況や韻字を同じうするに於いてをや、但し、仏語の運用の力は楽天何ぞ右丞を凌駕することを得ん、細心に読む者は、余が言の誤らざるを知るなり、

とある。白居易が王維の詩に倣ったことは明らかであろう。このことは、新釈漢文大系『白氏文集』には不載。

白居易の詩とは「遊悟真寺詩 一百三十韻」(〇二六四) 元和九年(八一四) 四十三歳の作を指す。

②伊藤正文『王維』(集英社 一九八三年 九一二頁)において、王維と白詩についても言及されている。伊藤氏は、白居易の

自解三四二二

房伝往世為禪客 房は伝う 往世は禪客^た為りと

王道前生^ま画師 王は道う 前生は^ま画師なるべしと

我亦定中観宿命 我も亦^ま定中に宿命を観ずれば

多生債負^{おおく}是歌詩 多生の債負は是れ歌詩なり

不然何故^{しか}狂吟詠 然らざれば 何が故にか狂わしく吟詠し

病後多於未病時 病後なるに 未だ病まざりし時より多きとは

を取り上げ、この白詩の「王道前生^ま画師」には、「王右丞詩云、宿世は詞客、前身^ま画師(王右丞の詩に云う、宿世は是れ詞客にして、前身は^ま画師なるべし)」の自注があるが、これは王維の「偶然六首」(其六)に「宿世謬詞客、前身^ま画師」とあるのによる。伊藤正文氏は「王維の作品と大いに関連がある」「これは王維の「偶然の作」其六のパロディであることが理解しうるであろう。」と述べられた。

四、両者の共通点 役人生活・人生

①半官半隠…王維は長安郊外に別荘輞川莊を作り、官にありながら悠々自適の生活を送った。白居易も江州で廬山草堂を建てた。白居易は晩年長安から洛陽に退去し、権力から距離をおいたが、官には就いて俸給は得ていた。

②ともに二十代で科擧に登第し、政府高官になった。官職も王維は右拾遺、白居易は左拾遺と似た官途を経験した。王維は中書舎人に

白居易の詩作に見られる王維の影響に関する一事例

なつたが、白居易も後に中書舍人に就いた。

③ 仏教・王維は詩仏と呼ばれたが、その名の通り仏教に深く傾斜したが白居易も仏教を篤く信仰した。江州司馬に左遷させられた時には、廬山東西林の僧と交流し、晚年洛陽に退去して香山居士と称した。

④ 絵画・王維は蘇軾に「詩中有画、画中有詩」と称されたほど絵画にも造詣があり、白居易の「病中詩十五首(其十五) 自解(三四二)」に「王右丞 詩云宿世是詞客、前身応画師」と自注があることは伊藤正文氏も述べられている(本稿第三章)。その他、澤崎久和「白居易と絵画」(『白居易詩研究』研文出版 二〇一三年)の論考がある。

⑤ 音楽・王維は『新唐書』の霓裳羽衣の逸話が有名で、音楽にも通曉していた。白居易も「琵琶行」を始め音楽に関する詩も多く音曲に通曉していたことは周知のことであり、数多くの先学の論考もある。

⑥ 白居易に「読李杜詩集」(〇九〇〇)の作あり、盛唐詩にも強い関心を抱いており、当然王維の詩も読んでいたはずである。杜甫が評価されるのは後の時代で、中唐では李杜よりも王維の方が評価されていたという意見もある。白居易との相違といえは、王維には酒や女性を詠んだ詩が少ないことであろう。

王維と白居易の草堂詩について言えば、王維が阮籍の詩を利用したことは当然白居易も知っていたであろう。その王維の詩に更に一ひねりして白詩は詠まれたと考えられる。それを都の友人に寄せ、都の友人達は王維の詩を想起しながら白居易の心情を理解したのではないか。王維は別荘での静かな秋の夜の独坐の満ち足りた境地を詠う。はからずも、江州司馬に左遷された白居易は、廬山に草堂を構え、秋の一夜、雨の中独り草庵に坐し、王維の「秋夜独坐」の境遇に共感した。その率直な気持ちを白は、七律の詩に詠み、都の友人達にわざわざ寄せた。都の友人達は、一読、王維の「秋夜独坐」を想起し、白居易もとうとう王維の安住・静謐の世界に入ったかと安堵したのではないか。都の友人を安心させるために詩を寄せた、とも解釈できるのでは。

白居易は晩年洛陽に居を構え、権謀術数渦巻く長安から距離をおいて、閑適の生活を楽しんだ。王維も長安から離れた藍田に草堂を営み閑適の半官半隱の生活を送った。白居易が政争の渦巻く都長安から逃れて、独善・保身を図る処世法を選んだ背景の一つに、王維の生き方があったのではないか。

追記

なお、この白詩は日本文学に多くの影響を与えたが、新釈漢文大系『白氏文集』の「廬山草堂、夜雨独宿、寄牛二・李七・庾三十二員外」詩の余説には、日本文学作品に見える多くの例を挙げている。今、その代表的な例を新釈漢文大系『白氏文集』から引用する。

藤原公任『和漢朗詠集』巻下、山家に、「蘭省の花の時錦帳の下、廬山の夜の雨草庵の中」と。

大江匡房『江談抄』第四に、「蘭省花時錦帳下、廬山夜雨草庵中」の句を引き、「古人伝云、此句文集第一句云々、故源右府仰云不避三連之句也、難為規模云々」と。

清少納言『枕草子』八十二段（岩瀬文庫蔵本）に、「いみじくにくみ給ふに、いかなる文ならんと思へど、（略）蘭省花時錦帳下と書きて末はいかにとあるを、いかがはすべからん、（以下略）」と。

藤原俊成『千載和歌集』巻三、夏に、輔仁親王「さみだれに思ひこそやれいにしへの草の庵の夜のさびしさ」と。

源通具等撰『新古今和歌集』巻三、夏に、皇太后大夫俊成、「入道関白、右大臣に侍りける時、百首歌よませ侍りけるに、郭公の歌」と題して「むかし思ふ草のいほりのよるの雨に涙な添へそ山ほととぎす」と。

藤原公任『公任集』に、「いかなるをりにか、草の庵をたれか尋ねむとの給ひければ、いる人、たかただ、九重の花の都をおきながら」と。

（以下略）

等があり、その他、謡曲・俳諧にも多くの利用がある。室町時代以降の例は新釈漢文大系『白氏文集』を参照されたい。白詩の「蘭省云々」の名句から多くの日本文学が誕生したと言えようが、その元は王維の詩にあった。

*本稿は、日本中国学会第六十七回大会（二〇一五年十月十一日 國學院大学 渋谷キャンパス）において口頭発表したものに加筆したものである。当日助言をして下さった方々に御礼申し上げます。